

フォーラム

特定非営利活動法人 奈良 21 世紀フォーラム会報

2023年
新春号
No.39

ニュース

◇ 2022 年実施の主な事業

2月19日 奈良の歴史文化資源の探訪の実施
「文学散歩－ならまちから高畑へ－」

6月18日 令和3年度 理事会・通常総会開催

10月29日 第13回大仏書道大会の開催
～30日

11月25日 奈良の歴史文化資源の探訪の実施
「紅葉真最中の信貴山朝護孫子寺参詣とトラ探し」



年頭のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。

昨年中は多大なご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

我々を取巻く環境は、今年に入りましても、新型コロナウイルス感染症の継続的な流行の中、国際情勢が厳しさを増し、物価の高騰や原材料の逼迫など依然先行き不透明な状況にあります。

当フォーラムにおきましては、2000年（平成12年）に奈良の文化資源を活かし地域文化の振興と活性化に寄与することを目的に設立され、本年度で設立23周年を迎えることができました。設立以来取り組んできた「万葉蹴鞠の復元」、「書の文化の伝承」、「県内の歴史文化の探訪」、「県内企業の企業文化・企業風土の調査と紹介」、「吉野川源流の水源地の森を守る活動支援」などの事業につきましては、コロナ禍で中止となったものもございましたが、各関係先のご理解とご協力のもと、昨年10月に「大仏書道大会」、2月・11月に「奈良の歴史文化資源の探訪」などを無事実施することができました。これもひとえに会員ならびにこれら活動にご協力くださった皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

今後の活動につきましては、新型コロナウイルスの感染状況を注意深く見極めつつ、有意義な事業を企画実施していきたいと考えております。日本の歴史・文化の発祥の地「奈良」において意義ある事業を展開、推進し、奈良から明るい情報発信ができるよう積極的に取り組んでまいります。また、会員の増強や財政的な基盤の充実にも努めてまいりますので、会員皆様の変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

本年が会員皆様にとりまして健康で輝かしい飛躍の年になりますよう、心からお祈り申し上げます。



理事長 植野康夫

(2023年1月吉日)

令和4年度理事会・通常総会開催

—活動実施の方針・事業計画を決定—

○令和4年度通常総会の開催

令和4年度の通常総会は、6月18日（土）にホテルリガール春日野において開催しました。総会では、令和3年度の事業報告と決算の承認、令和4年度の活動実施方針、事業計画および予算を決定しました。また、一部理事の変更があり、新たに加古哲理氏が専務理事に、津山恭之氏が監事に就任されました。なお、中村優造専務理事、近東宏佳理事、福嶋重博監事は退任されました。

◇活動実施の方針

奈良県の歴史文化とそれを取り巻く自然環境の魅力を再発見し、奈良県の活性化に結びつく提案活動を行う。まず伝統的芸能文化として定着しつつある「万葉蹴鞠」の紹介に努める。また奈良県内の伝統行事の紹介ほか、奈良県の観光立県としての持続的な観光振興のための取り組みに積極的に協力する。そのほか、奈良県に根をおろし、発展し続ける企業の伝統、文化、経営理念と、奈良の風土と



のかかわりを調査、記録し、県内で活躍する企業を県内外に紹介する。まちづくり等を支援する企画事業の提言・提案事業は、川上村で実施される「源流まつり」等に協力する。

◇令和4年度の実業計画

①「万葉蹴鞠」の復元

県内における伝統的芸能文化として発掘した「万葉蹴鞠」の実演を通して県民に伝統的芸能文化を啓蒙すると同時に、当県への観光誘致の基礎資源として活用する提案を行う。

②「書の文化」の伝承

東大寺の協力を得て大仏書道大会を開催する

全国から作品を募集し、入選した100点の作品を大仏殿西回廊において展示する。

大仏殿西回廊において席書会を開催する。

③「奈良県内の歴史文化資源」の探訪

日本人の心の原点をさぐる活動として、奈良県内の神社仏閣をはじめとする文化資源を顕彰し、新たな視点で紹介する。合せて食文化を発掘し、観光資源として地域活性化に結びつける提案活動を行う。

④「奈良県企業の企業文化、企業風土」の調査、紹介

奈良の風土に生まれ成長するユニークな企業を対象に、製造・製作・展示等の現場や様々な形で社会貢献に励む企業のリアルな姿に触れる機会として企業見学会を実施する。

⑤「吉野川源流の水源地の森を守る活動」支援

川上村の自然、歴史文化を体験するバスツアーの実施、源流まつり等への協力を行う。

2022年1月から12月に実施した事業

1. 書の文化の伝承

◎第13回大仏書道大会「書くことは楽しい in 奈良」を開催

実施日 令和4年10月29日（土）～30日（日）

会場 東大寺大仏殿西回廊

10月29日（土）から30日（日）の2日間、東大寺大仏殿西回廊に於いて「第13回大仏書道大会」の書道展を開催しました。

当書道展は、平城遷都1300年を記念して始まって以来毎年開催しており、今年で第13回目を迎えました。単なる教科書的な技術だけではなく、自由な感性、創造性や味わい深さなども加味し、書の可能性を感じさせるような作品に光をあてる稀有な大会として、全国から毎年多数の応募をいただいています。コロナ禍で学校の行事日程の変更や部活動が制限されるなど、作品の募集に大きな影響が出るものと案じられましたが、関係する多くの方々のご協力もあり、全国68の高校・大学から1,463点の応募を頂くことができ、コロナ禍前のレベルに戻りました。

同書道展にさきがけ10月8日には、朝日新聞社奈良総局において森本公誠・東大寺長老（当フォーラム理事・特別顧問）を審査委員長に迎え、高校や大学の書道教員の方々に審査に携わっていただき、7点の特別賞と93点の入賞作品を選定しました。

筆で書く楽しさが伝わってくる作品、若者らしい意欲的で力強い作品など個性を発揮した作品が数多く見られました。また、優れた作品を多数応募された団体に贈られ



審査会（朝日新聞社奈良総局）



展覧会（大仏殿西回廊）

る奨励賞には、兵庫県立芦屋高等学校、大阪府立北野高等学校の2校が選ばれました。今年も受賞作品100点を東大寺大仏殿西回廊に展示し、入選者や学校関係者をはじめ参拝客や観光客の方にも観覧していただき、680名余りの来場を得ました。

30日には3年ぶりに席書会を開催し、東大寺・森本長老のお話しを伺った後、写経と自由題で作品を揮毫。作品は大仏様に奉納しました。

☆特別賞7点の紹介

奈良県知事賞「のんびりのびのび」

山下 花菜さん（新潟県立新津南高等学校）

平仮名ばかりの文に「の」が三つ続きますが、その変化に富んだ「の」や他の平仮名すべてがこの言葉の意味を伝えるに相応しい自由で伸びやかな書きぶりです。さらに仰向きになって伸びをする「猫」の描写も書の線同様にほほ笑ましく生き生きしています。茶掛けに仕立て床にかけると和やかな茶会が始まりそう、そんなのどかで楽しい一幅の作品となりました。

奈良県教育長賞「涓滴岩を穿つ」

西本 有希さん（奈良女子大学）

作者は学部受験の際の悔しさを乗り越えて夢を抱き続けた、そんな四年間の想いの全てをこの作品にぶつけました。その強い意志を表現するために選んだ詩です。そして隷書を学んだことで培った確かな技法が筆墨で自己表現する時の何よりの強みとなりました。「技術優先ではない」と謳っている本展ではありますが、古典を学ぶ本来のねらいはそこにあり、これまで体験したこと、想いも願いも技も総動員して書作に取組み、その時の自分をこのように残しましょう。

奈良市長賞「Passion」

山田 美優さん（富山県立富山商業高等学校）

半身像の「せんとくん」を細い線で左に描いたことで、平凡になりがちな横長の英文に、よりインパクトを与えています。英文の運筆は生き生きとし、特にSの書きぶりはよく筆を使いこなしており、パッション(情熱)に対する思い入れを感じます。「せんとくん」の赤い襷の色を、右の文字の背景として絶妙に配置し連動させたことで左右に自然な広がりにつながりが生まれました。余白を活かした構成で、紙面以上の大きな空間が表現されています。

奈良市教育長賞「止観」

山本 陽さん（兵庫県立小野高等学校）

水を含ませた筆先の一部にのみ墨を付け、一気に「草書」で書いたことで墨の濃淡がうまく美しく表現されました。「止観」という仏教的な言葉を選び、その二字にコントラストを付けた伸びやかな筆の動きは見事で、並々ならぬ意気込みが伝わります。柔らかい毛筆の特性と墨色の妙を存分に生かした作品となりました。墨の産地である奈良への熱い想いも感じられて嬉しいです。

東大寺賞「四法印」

佐藤 珠希さん（大阪市立大学）

おしゃれな作品です。書かれた内容は仏教の根本にある四つの概念「諸行無常、涅槃寂靜、諸法無我、一切皆苦」。これを横書きに左から右へと書くとはい時々の若者らしい発想です。揚州八怪の一人「金農（号は冬心）」の方形の隷書を「集字」、古典（クラシック）の要素を取り入れながらも、モダンでデザイン性に富んだ完成度の高い作品となりました。淡紅の色彩が重苦しさを救い「切」の最終画が効いており、名前と印が上手い補空表現となっています。

朝日新聞社賞「惺々着」

長谷川 天音さん（新潟県立新津南高等学校）

禅書「無門関」十二則に「主人公よ」と自分に呼びかけ、次に「惺々着（目を覚ましておれよ）」「諾（はい）」と自問自答するユニークなお坊さんの話があります。高校卒業を前にした作者は、この禅語をこれから先の心構えとして捉え、重くなりがちな言葉を明るい色調の下絵に軽やかにしたためました。柔らかい「鳥の毛」の筆を用いることで生まれる粘り強い独特の線質は藏鋒による筆使いです。その筆先で名前も書き、まとまりのある作品となりました。

奈良 21 世紀フォーラム理事長賞「広い世界」

小原 直子さん（兵庫県立伊川谷北高等学校）

審査員一同「界と読めるから不思議ですね」と目が釘付けになりました。長く書を学んだ者にはこのような表現は新鮮です。「世」は直線的で力強く絵画のよう、対する「界」は伝達としての文字性を否定することなく斬新な試みで書かれています。自分の想いを伝えるために、既成の書法に囚われることなく様々な工夫し自分にしかできない表現に挑戦する姿勢は潔く、書の一つの可能性を感じさせる作品となりました。

奈良県知事賞



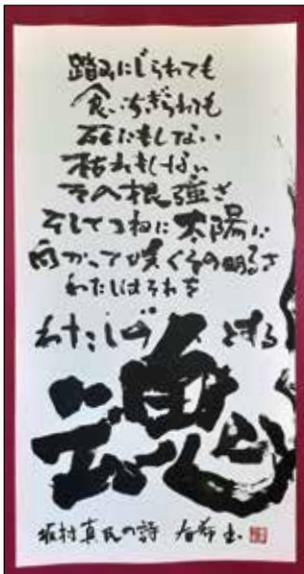
新潟県立新津南高等学校 山下花菜さん

奈良市長賞



富山県立富山商業高等学校 山田美優さん

奈良県教育長賞



奈良女子大学 西本有希さん

奈良 21 世紀フォーラム理事長賞



兵庫県立伊川谷北高等学校 小原直子さん

奈良市教育長賞



兵庫県立小野高等学校 山本陽さん

東大寺賞



大阪市立大学 佐藤珠希さん

朝日新聞社賞



新潟県立新津南高等学校 長谷川天音さん

2. 「奈良の歴史文化資源」の探訪

(1) 文学散歩—ならまちから高畑へ—

中将姫、會津八一、志賀直哉ゆかりの地をめぐる

実施日 2022年2月19日(土)

参加者 7名

午前10時近鉄奈良駅集合。興福寺へ向かう。かつては藤原氏の隆盛とともに栄えた興福寺は七堂伽藍が立ち並んでいたという。しかし、廃仏毀釈の暴風が吹き荒れたとき、その風を真正面から受けることになる。かろうじて残った五重塔や数棟の建物、現在再建になった中金堂が加わり、南大門跡も整備された。しかし、解放感はいまも昔も変わらない。



興福寺南大門跡

會津八一は春の時を詠んだ

「はるきぬと いまかもろびと ゆきかへり ほとけのにはにはなさくらしも」

目を閉じてこの歌を口ずさむと明るく晴やかな興福寺の境内を笑顔の人々が行き交う姿が浮かぶ。本堂前にこの歌碑が建つ。五十二段の石段を下り猿沢池へ。

「わぎもこが きぬかけやなぎ みまくほり いけをめぐりぬ かささしながら」

八一は27歳のとき失恋の痛手を癒すためにはじめて奈良に来て、詠んだ一首である。

悲恋の「采女伝説」を伝える衣掛柳を見たいと、雨の降る中を転害門近くの宿「對山樓」の浴衣と番傘で、猿沢池を訪ねたという。奈良の風物に出会い、多少なりとも心を癒した八一はこの旅で短歌20首を詠んでいる。

等々の説明を講師から受けながら、南へ進むとそこはもう奈良町。2階の軒に手が届きそうに低い厨子(つし)2階の家並みが、せまい道の両側につづく。商家の名残を伝える家もある。そして切妻を空へそびやかす大和棟の家も。江戸時代から明治にタイムスリップしたような錯覚におちいる。

上街道を通り、中将姫ゆかりの寺を訪ねる。尼寺である「高林寺」は、中将姫が発心し、仏道修行の地としたと伝わる。本堂中央須弥壇の上には、父藤原豊成と中将姫像を並べて祀る。本堂前に豊成の墳墓があり、そのかたわらに植えられたボタンの花はまるで父に寄り添う中将姫の姿と重なる。と、講師は話す。訪ねた日は、境内に入ることが出来ず、想像にとどまった。そして一本西の筋に入ると、その辺りは、昔、木辻遊郭のあったところ。いまその名残がみてとれるのは、宿屋と苦界の遊女たちに引導を渡す寺として知られる称念寺のみとなり、町並みにその面影はない。

体も冷えたところでお昼は、豆腐専門店の食事処で田楽と湯豆腐で体を温める。

昼からの行程は、中将姫誕生地と伝わる誕生寺へ。この地には中将姫と両親の御殿の三つの棟が並んでいたと伝わり、町名に。地元では「東木辻の三棟誕生寺」と親しまれてきた。

本堂中央には、中将姫自作の静かに合掌する坐像が参拝者を見据えている。白絹を被った肌色のお顔に力強い目、丸みの下の骨格はしっかりとしていて、意志の強さがかげえ、より人に近いリアルさがある。よく「人形の顔は彫り手に似る」といわれるが、この像をじっと見つめていると生身の姫と対面しているような錯覚に陥ってしまう。



徳融寺

本堂裏の庭に出ると、姫が生まれた時に使ったという産湯の井戸、そして中将姫が二十五菩薩によって極楽浄土に導かれたようすを、石仏を置いて再現。楽器を奏でるなどの豊かな表情の二十五菩薩は芸術作品のようだ。そして徳融寺へ、ここには中将姫と父の宝篋印塔が横並びにあり、幼い中将姫がしぼりつけられ氷雪責めにあったとされる松の木の跡に、そのことを示す説明版が建つ。墓地からの夕陽はすばらしい。

ここからはしばらく歩き、高畑の社家町に入る。上高畑は鎌倉時代より春日大社の社家町として栄えたところで、今でも、1・2軒のくずれかけた古い土塀が屋敷の所在を示すかのように残っている。等々、講師から高畑の社家町の歴史などを伺った。

そして、同じ地には志賀直哉が9年間住んだという旧居がある。志賀直哉が自ら設計した家で、高畑サロンの名も。太陽がふりそそぐサンルームには彼を慕う文化人が集い、また「暗夜行路」を完成した家でもある。大原荘司館長に館内をご案内していただいた。各部屋の説明や、私生活に至るまでの話は興味がつきなかった。最後に庭を散策して、旧居をあとにした。

最後は新薬師寺。「新」とはあらたかの意味。聖武天皇の病氣平癒を祈願して、後の光明皇后が創建されたことは有名だが、この寺のインド系の大きな目の本尊は、眼病に霊験あらたかとか。そして本尊を守る十二体の武将はわが国最古の塑像、「十二神将立像」がそれぞれ個性あふれる表情で本尊を取り囲み並んでいる。

ここでも、八一は歌を詠んでいる。盗難にあい、いまだ行方不明の香薬師を詠んだ歌「ちかづきてあふぎみれどもみほとけのみそなはすともあらぬさびしさ」と「たびびとにひらくみだうのしとみよりめきらがたちにあさひさしたり」

の二首を紹介。歌の視点で十二神将をぐるり一周する。すると迷企羅大将の位置がおかしい、との講師の指摘でそのことに気づかされた。その謎が明かされ納得。最後は各々に、干支に充てられた十二神将に掌を合わせた。

帰るころには、先ほど来降っていた小雨も上がり、寺をあとにした。(N・N記)

(2) 紅葉真最中の信貴山朝護孫子寺参詣とトラ探し

実施日 2022年11月25日(金)

参加者 8名

王寺駅から路線バスに揺られながら、約25分、車窓からは高度が上がるにつれて眺望が開け、紅葉が鮮やかさを増してきた。「信貴大橋」バス停で降りると雲一つない晴天、日差しは暖か、おまけに紅葉が真っ盛りだった。

まずは駐車場の一本の大きなモミジに迎えられ、黄赤とグラデーションの色付きの美しさに歓声があがった。

歩みを進めていくとやがて全長6メートルの巨大な張り子のトラに迎えられた。お寺のシンボルで、その名も「世界一の福寅」。日・祝日には首が電動で動くのだそうだ。みんなは、後方にそびえ建つ本堂をバックに入れ、写真撮影。その横に並ぶ2匹の可愛い子トラは、子どもたちに人気のようだ。



巨大な張り子のトラ

今回のお寺の探訪は、ちょっと視点を変え、トラの寺・朝護孫子寺ならではのトラ探

しが加わった。実は、この張り子のトラの手前の石燈籠が並ぶ後方に、誰にも気付かれずに居るトラを講師に教えてもらった。周りにたくさんの小さなトラを従えているとてもリアルな等身大の石造のトラは今にも動き出しそう。

入口の案内板の前では、朝護孫子寺の起源について説明があった。

「聖徳太子の時代にさかのぼる。排仏派の物部氏と崇仏派の蘇我氏との権力争いで、聖徳太子は馬子側につき、この山で戦勝祈願をした。すると、毘沙門天が現れて、「必勝の秘法」を授けたと。それが「寅の年、寅の日、寅の刻」だった。太子は毘沙門天王のお蔭で、戦いに見事勝利し『信ずべき・貴ぶべき山』として、信貴山と名付け、自ら作った毘沙門天を祀ったのが、この寺の始まり」と。この伝承から「寅の日に信貴山の毘沙門天さんにお参りするとご利益がある。特に勝負運や金運に強い」と信じられ、今日に至っている。

境内に沢山いるというトラを探しながら、昼食をいただく「玉蔵院」に向かう。宿坊でもある和室にご案内いただいた。朱塗りの御膳が、隣の席との間隔を取りながら並べられていた。高野豆腐と野菜の一人鍋、こんにゃく等の刺身もどき料理、野菜の天ぷら、茶碗蒸しなど、精進料理の数々を楽しんだ。体も温もり、食後参加者一人ひとりの自己紹介が行われた。引き続き講師からトラについてのお話し。

「日本には生息していなかったにもかかわらず、昔から多くの美術品やおもちゃなどに、その姿が表現されてきた」。日本におけるトラの歴史を振り返って、詳しく説明を受けた。そして僧侶の説明では、寺の歴史や毘沙門天について。「朝護孫子寺は一般によくある檀家寺では

なく信仰の寺である。また、朝護孫子寺にはこの玉蔵院をはじめ成福院、千手院と、3つの塔頭があり、「朝護孫子寺」はこれらの総称である」等・・・。

この後、僧侶の先導で本堂へ。内陣に入り、ご祈祷を受ける。力強い読経や、太鼓、鐘の音は広大な境内全体に響き渡るほど。訪れた日は、本尊が納まる厨子のご開帳の時期は過ぎ、毘沙門天親子三像のお前立ちに手を合わせる。僧侶の説明の後、内陣を半周して外に出る。

みんなはご祈祷に「厄が払われた感じがする」、「心が洗われた」等々・・・口々に話していた。本堂舞台からの壮観な眺望を楽しみ、本堂を降りた。



僧侶のお話しを聞く

再び、トラを探しながら山門の方へと向かう。檻に入った原寸大の石のトラ、そのすごみのある表情から今にも檻から飛び出してくるような迫力で迫ってくる。隣のお堂の装飾にもトラを



金と銀のあ・うんのトラ

発見。そして金と銀の狛犬ならぬ“あ・うん”のトラ。玉蔵院敷地の札束を啜えた御影石の等身大のトラは「一億円の虎」だそうだ。

下の方の千手院にはまだトラが！ パクッと開いた大きな口が入口の、全長10メートルの「三寅の胎内めぐり」ができるトラ、このトラは父と母がお尻を突き合わせた形になっていて、背中には子トラが乗っているユニークなもの。中を通り抜けると「三寅の福」が得られるそうだ。最後は信貴山で最も古いと伝わる石造りの「笑寅」、ニ

ヒルな微笑がなんとも魅力的だった。

ここまでで、山内を一周したことになるが、中田講師の見つけたトラの数は、二十数種類、三十匹ほどにのぼるという。これらのトラの全ては信者から奉納されたもので、参拝の記念やご利益を授かった御札にトラを奉納するようになったという。

最後に無病息災・病気全快にご利益があると伝わる「けんがいごほうどう 劔鎧護法堂」にお参りして行程を終えた。

今回寅の年にトラの寺を訪れたが、コロナ禍で日程が延期になった結果、今年も残すはあと1か月余り参拝となり、寅年の締め括りとして、この1年に感謝するとともに、明年への期待を膨らませた。(N.N記)

役員名簿

(2023年1月1日現在)

職名	氏名	職業(経歴)
理事長	植野 康夫	(株)南都銀行 特別顧問
副理事長	谷口 宗男	奈良交通(株) 相談役
特別顧問・理事	森本 公誠	東大寺長老
特別顧問・理事	堀井 良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会 顧問
理事	上野 誠	國學院大學 教授
理事	卜部 能尚	ウラベ木材工業 代表
理事	扇谷 泰之	(株)シードコンサルタント 相談役
理事	花山院弘匡	春日大社宮司
理事	榎木 康雄	新日本料理材料研究会 主宰者
理事	菊池 攻	奈良トヨタ自動車(株) 取締役社長
理事	久保 昌城	竹茗堂 左文 代表
理事	桑原 克仁	近鉄ケーブルネットワーク(株) 取締役社長
理事	小山 新造	小山(株) 取締役会長
理事	澤田 啓二	元東大寺学園中・高等学校教諭
理事	高田 知彦	奈良中央信用金庫 理事長
理事	高松 啓二	(株)近鉄百貨店 取締役会長
理事	中井 隆男	大和ガス(株) 相談役
理事	中田 紀子	エッセイスト
理事	西川 恵造	(一財)南都経済研究所 理事長
理事	林 信	近鉄グループホールディングス(株) 取締役常務執行役員
理事	森本 俊一	三和澱粉工業(株) 取締役会長
理事	米田 昭正	KNT-CTホールディングス(株) 取締役社長
専務理事(事務局長)	加古 哲理	奈良交通(株)総務人事部嘱託アドバイザー
監事	津山 恭之	東大寺総合文化センター 総長代理
監事	中寫 大	中寫大会計事務所 所長

(50音順)

2023年1月発行

編集 加古哲理

発行 NPO法人 奈良二十一世紀フォーラム

〒630-8244 奈良市三条町511-3 奈良交通第2ビル